



レポート

富士山の生い立ちに関連して

堀内 弘栄

「かわさきアカデミー講座の富士山の生い立ちを探る」に参加した。バスで田園都市線たまプラーザ駅から富士山泥流のある御殿場付近のまでの巡検である。思いのまま書いていく。

筆者の住む川崎台地の赤土は関東ローム層である。台地の表面は植物の根が入っているが、古いものは箱根火山、新しいものは富士火山の火山灰である。南関東のテフラは 45 万年位前のものである。箱根火山のテフラも 45 万年位前のもので富士山は十萬年前位のものである。平均すると 1 万年で 1m 堆積する。従って、数十 m 堆積している。

川崎生田のおし沼切通しに古い関東ローム層がある。これを多摩ローム層といい 45 万～10 萬年前のものである。

その上の関東ローム層は、下末吉ローム層(13～8 萬年前)、武蔵野ローム層(8～5 萬年前)、立川ローム層(5～2 萬年前)とある。下末吉台地は海成段丘である。

さて、1970 年代の研究で関東ローム層は細かく分類されるようになった。

富士山は武蔵野ローム層と下末吉ローム層の時代である。富士山は溶岩と火山灰、二つが 何枚も載る成層火山である。宝永火山灰 1707 年のマグマはすべて火山灰になった。発泡状態で火山灰になるか、溶岩になるか、ビールが冷えるような状態では溶岩になって噴出する。

今日は①火山灰を観察する。②山体崩壊も観る。安息角を超えるような斜面は今もある。御殿場泥流堆積物である。

2900 年前のことであった。この堆積物は御殿場まで覆った。小田原、鴨宮まで覆った。

東名高速を通過し御殿場 IC から一般道に下りた。この辺り、御殿場泥流の堆積台地である。岩屑なだれもあった。岩屑なだれの場所には流山が出来る。流山は、海中に出来ると島になることがある。

雲仙の前山は流山であった。火砕流はマグマそのものである。雲仙普賢岳がそれである。溶岩ドームが不安定になって崩壊崩落する。高温ガスが含まれているので噴煙となって下る。それが、シラス台地を造った始良カルデアがそれである。始良カルデア噴火の噴煙がシラス台地を造ったのであった。

宝永火山噴火は白い軽石が最初に出た。観測地点①は富士霊園の入口に近いところ、(富士霊園入口バスあり)。富士山の宝永噴火をまともに受けた場所だ。

黒土はクロボク。赤土は関東ローム層。粗い砂利は宝永火山灰層である。白いのが宝永の白い火山灰層である。／標高 550m 地点。噴火初日の日中に白い火山灰が降った。その後、16 日間噴火が続くが黒いスコリアであった。



白いのはいはデイサイトである。黒は玄武岩である。火山灰は 3m ほど溜まったという。



帯状である。黒は、富士黒土層という。スコリアはカリカリ音がする。黒土層は富士山活動が穏やかな時代のものである。10000～5000 年前の時代である。植物が覆われ

ていたことの証拠を示すものである。米は痩せ地に美味しいものが出来るというが、三ヶ日は蛇紋岩(青い)が多い。よってミカンが美味しいのだという。尚、赤色土上には、御殿場泥流が載っている。

古酒匂川河成段丘の出来た時代の駿河礫層観察に不老山側の谷に行く。一番下の層は約 10 萬年前である。この付近①花崗岩質の岩石がある。トータル岩である。花崗閃緑岩に近い。②緑色の石がある。緑色凝灰岩である。中川流域に出ている。昔の河内川の合流部分であろう。

中井町、大磯町で砂利が採集されている。ここには、ここにある花崗岩質の砂利がないので、酒匂川は当時、中井町、大磯町には流れていなかったことになる。よって、駿河礫層である。

駿河礫層の主流部露頭である。(photo3)



この駿河礫層は角ばっている。尚、花崗岩はこの露頭にない。この付近、林道入口は、昔の酒匂川が流れていた当時の川岸に近い部分で、丹沢山地から供給された角の取れていない礫が目立つ。間を埋めているものは砂ではないので、本流の影響のない地域に溜まったものである。多くは、流水によって再堆積された火山灰土であって、「水つきローム」などと呼ばれる。

駿河礫層の中に厚い軽石層がある。

上から関東ローム層、石、砂、石。関東ローム層が覗かれるが砂が入っているの砂そして、礫の順、軽石が風化して錆びて茶色になっている。軽石はどこから来たのであろうか。富士山小御嶽から来ている。又は、先小御嶽である輝石テフラであり、ここから北方約11kmの道志道山伏峠でも1mもの厚さのものがある。

この色で、なじみ深いのは、鹿沼土である。3万年前のものである。

ここは、10万年前に堆積が終わっているのので、～9万年前の噴出層、下末吉ローム層に対比される。

また、大磯丘陵ではKmP(吉沢ローム中部層)テフラ群に属する可能性もある。角閃石、黒雲母は限定される。これも、輝石を含み特徴がない。御嶽山には黒雲母が入っている。



御嶽山火山灰でOn-Pm1である。(photo4)

厚さ1mはある。約10万年前のものである。1m堆積は相当大きい噴火であった。100k m³に近いものだった。

この露頭On-Pm1は保存が良く素晴らしい露頭である。

以上、御殿場周辺露頭に観察できるテフラ関連をオオザツパに記載した。

[下記、露頭位置を国土地理院地図で見る]

<http://maps.gsi.go.jp/#15/35.371963/138.971415/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0t0z0r0f0>

(2018_01_15付)

連載・上信の峠路 ④

会所 (上信国境—上野・南相木村境) その4

富永 滋

【峠の呼び名について】

次に峠の名称についての考察を行いたい。前述の様に明治13年頃まで会所を越えて馬で荷を運んでいたと口承されるが、道に関する当時の公式な記録は見当たらない。同11年の郡村誌の南相木村の章に、上州への無等道路があり小海村境の川又から白井の村境まで五里とされているが、これは相木道のことであろう。江戸時代に、米が馬背で広瀬から南相木、北相木を経て梶峠越えて運ばれていたと云うので、明治初期にも大して変わりなかったと思われるからである。当時の道路には一等、二等、三等の等級があり、佐久甲州街道(現在の国道141号)がやっと三等とされ、他の地方道はすべて無等とされていた。明治10年頃、三川から上州への道路計画が頓挫したとされ、ましてや馬道は少なくとも村役場に峠道として認識されるほどのものではなかったと見られる。

大正2年に神流川源流の村人からこの峠道の存在を聞いた高畑棟材は、同10年に再訪し更なる情報収集を試みたが、人によりまちまちで統一した見解が得られなかった。この時、会所の名称について調査したかは定かでないが、少なくとも確固たる情報は得ていないと見え、信府統記の「これい峠峰通国境十石峠ヨリ辰巳ノ方」(註:コレイ峠は十石峠から上信国境を尾根伝いに南東の方向)の記述と、富士見十三州図が示す中之沢の南西に位置する「コレイ峠」の文字とから、1705独標の名称がコレイ峠と推定したと見られる。

しかし江戸時代の地図の精度は内陸部では極めて低く、伊能図



富士見十三州図 (天保十三年—1842年)

が海岸線と内陸の主要街道沿いを正しく示した以外は、どの絵図も地点間相互の距離と方角と不正確で、こと人跡稀な神流川流域に関してはいい加減極まりないものだった。信府統記が記す十石峠の南東方向には実際には国境越えの峠は全く存在せず、南西三軒弱の位置に梶峠が存在するのみである。また富士見十三州図においては、檜原、浜平の位置や神流川を幾度となく渡り返すはずの十石峠街道の描き方もおかしいのだが、上信間の峠道についても、白井関から大日向へ越す十石峠街道と北相木へ越

75m) (津久井城跡)がひと際高くそびえているのが見える。今日の行程は高尾山口駅まで歩いて正味3時間余なので、ゆっくり気分だ。雲一つない晴天なのだが、春の天候なのか山々はクリアには見えない。しかし展望は良く、峰の薬師らしい白い建物が見えた。



しばらく舗装道路の歩道を歩いて中沢の集落へ。関東ふれあいの道の道標を確認して右折すると正面に鳥居が見え、三嶋神社着。一応石段を登ってお参り。ここは三嶋大社の分社との事。石段下にはお祭り用かもしれない運動場のような広い広場がある。小休止して出発(9時55分)。次第に山道にはなるが、簡易舗装されていて歩きにくいことはない。30分程展望が全くない林の中を登り、峰の薬師は右という赤い矢印の看板がある分岐着(10時25分)。そのままいくつか大きなカーブを経た歩きやすい道を登ると峰の薬師の管理事務所がある広場へ(10時45分)。広場から南に広がる展望は素晴らしい。ここは武相四大薬師の一つで1500年前後の創建という。登ってきた方向に折り返すように少し上に進むと鐘撞堂(3回撞いて10円奉納とのこと)を経て、その先に本堂が見える。ここが今日の関東ふれあいの道撮影ポイントに指定されている。写真を撮って薬師堂へ。

白いコンクリート造りのようで“歴史”が感じられない建物だ。調べてみたところ、明治に入って神仏分離により廃堂になった。本尊は下におろされていたが、昭和の初めに再興されたのだという。造りから考えれば近年再び改修されているのではないだろうか。本堂右側のふれあいの道ルートからの展望も素晴らしい。続いて奥の院へ向かう。少し進んだ右側にベンチがあって、このコースでは足元から開けた景色の展望台になっている。すぐに奥の院到着(11時10分)。ここもコンクリート作りの二階建ての建物で、正面はシャッターが閉まっている。両脇に取り付けてある錆びた鉄の階段を登ると本堂で、後ろを向けば展望テラスという作りだ。弥勒菩薩が祀られているようだ。

ここまで登ると三沢峠へは大した登りはない。国や自治体の防災無線のアンテナの脇を通り抜けて草戸山方面と三沢峠方面の分岐に到着(11時30分)。すぐ後ろの高いところへ移動して昼食。ここは榎窪山(420m)という標識がある。何度か来たことはあったが、山の名前を初めて知った。



昼食後、三沢峠方向へ。ベンチでは我々の年代風の5、6人が昼食中。今日の登りは完了。三沢峠から梅ノ木平へ下山開始(12時5分)。湿っていてうすら寒い展望がない谷筋の林道をひたすら歩く。展望はないし、何の面白みもない。この部分は東京都の関東ふれあいの道と重なっている。路面には先日の雪が

所々まだ残っている。凍結している箇所もいくつかあって少々気を使ったが、誰も転倒などすることなく梅ノ木平着(12時50分)。バスは16時過ぎまでない。高尾山口まで歩くことは覚悟の上だったので、国道20号に沿って歩き出した。

歩き出すとすぐ、昔はなかった高尾山インターチェンジが出来ていて車の出入路に沿って歩かなくてはならない。気が付くと歩道との間にあるガードレールは全て丸太で作られていて、そのまま高尾山口駅方面へずっと続いている。白い鉄板のそれよりも周囲になじんでなかなか良いと思うが、強度の方はどうなのだろうか。やがて左手に“TAKAO599 MUSEUM”が見えてきた。玄関前で靴の泥を洗い、小休止することにして本日の山行は終了(13時30分)。以後、八王子へ移動していつものように反省会を楽しんだ。以上

廃れの系譜 ⑥ 廃図 地図と設計図

今回は図面の話である。

現役時代、商品開発の担当部署で、常に製図台に向き合い図面と格闘してきた。もちろんまだCADなんて無い頃の話である。テーマが与えられそれに沿うような新しい発想を求められたり、テーマそのものを提案しなければならないこともあった。トレペに線やイラストを描き文字や数字を書き込んで、白い平面が埋め込まれていった。こんな作業を作図という。図面には、作図者の意図がそのまま反映することもあれば、全く異なる方向に向かってしまうこともある。図面を介してコミュニケーションが計られ、さまざまな用途に使われ始めるとき、単なる紙切れが貴重な情報源に置き換わる。もう一方で、すでにあるものを図面に置き換える作業もある。立体を二次元に置き換えることにより、いろいろ便利なのが出来るので、製造業に限らず、この作業は重要な業務の一つだ。

地図の作成も、実際の地形を二次元に表現することなので、同じことなのだがここには三面図というものがない。平面図だけで立体を表現することを要求されるので、垂直方向の値が等高線というものに置き換わる。この等〇線は天気図の等圧線、等温線、等照度(分布線)などに利用され表現の幅を広げているのであるが、この曲線を頭の中で立体に置き換えることが極めて苦手だという人も多い。地形図でいえば、尾根と谷の区別がつかないということだ。図面を読むということは地図を読むことと同じで、ただ見ているだけでは何の意味も無いことは全く同じである

それらの地図や図面も役割を終えると、廃図という運命が待っている。だが、この廃図という意味についてはそれぞれの図面ではすこしづつ意味が違うようだ。たとえば 国土地理院の地形図は新しい図幅が発行されるといままでのものは販売できなくなり廃図となるが古い版の地図は作られた時代を記録する重要な資料となる。一方設計図などの廃図となったものは、その存在すらかき消され、無かったことになる場合が多い。今、手元にある古い自作の図面は思い出を辿る紙切れでしかないが、処分できないまま、書棚の肥しとなっている。(近藤善則)

AGC レポート vol-61 2018年3月1日発行
 発行: 日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 日本山岳会 気付
 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
 編集担当: 近藤 E-mail: yoshi-kondo@com.home.ne.jp